

伝統工芸・地場産業振興で 地域活性化



しろま みきこ
城間 幹子
なは
那覇市長(沖縄県)



ひらき てつろう
平木 哲朗
はしもと
橋本市長(和歌山県)



かたおか のりひこ
片岡 憲彦
とこなめ
常滑市長(愛知県)



かめやま とよふみ
亀山 豊文
きりゅう
桐生市長(群馬県)

司会・コーディネーター

ほ その すけひろ

細野 助博

中央大学総合政策学部教授

幾世代にもわたって地域に根付いている伝統工芸や地場産業。昨今のライフスタイルの変化、大量生産方式による安価な生活用品の普及、海外からの安価な輸入品の増大などにより、厳しい状況が続く中、地域資源でもある伝統工芸・地場産業を盛り立て、地域の活性化につなげようと、海外も含めた市場開拓など、さまざまな施策を進める都市自治体も少なくありません。

座談会では伝統工芸・地場産業の振興に努める亀山・桐生市長、片岡・常滑市長、平木・橋本市長、城間・那覇市長にお集まりいただき、それぞれの伝統工芸・地場産業の特徴、ブランド化に向けた取り組み、観光資源としての活用、後継者育成に向けた施策などについて、幅広くお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)



桐生市は京都の西陣と
並び称される織物の産地。
豊富な歴史資源を
生かしながら、産業観光の
振興にも取り組んでいきます。

亀山 豊文
桐生市長(群馬県)

伝統工芸・地場産業を守り、育てる

細野

伝統工芸は、これまで長きにわたって地域の経済を潤してきたことに加え、その地に伝わる文化や伝統行事なども金銭的に支えてきた、貴重な地域資源の一つです。近年は、グローバル化の中で安価な海外製品などに押されがちですが、多くの自治体が振興策に努めています。

ます。

それでは、各都市の伝統工芸・地場産業の特徴や現状についてお聞かせください。

亀山 桐生市は「西の西陣、東の桐生」と言われるように、京都の西陣と並び称される織物の産地であり、織都とも呼ばれてきました。

この桐生市の織物の歴史は古く、しよくにほんぎ続日本紀には西暦714年(和銅7年)に朝廷に「あしぎぬ」を納めたとの記録があります。これにちなんで、桐生市では平成26年から27年にかけて、織都1300年を記念したさまざまな行事を開催しました。

桐生織は、国の伝統的工芸品に指定されていますが、織物だけでなく、企画から製品化までのデザイン、ねんし撚糸、編み、刺繍、縫製など、織維に関する多岐に渡る技術がこの地域に集積しています。平成26年の工業統計調査によると、従業員4人以上の事業所のうち、3分の1が繊維関係の事業者であるなど、繊維産業は現在でも主要な産業です。

しかしながら、生活様式の変化による和装離れや、外国製品との競争、将来に向けた人材育成など、さまざまな課題が山積しています。桐生市ではこうした課題の解決に向けて、関連団体と連携しながら、各種施策を推進しています。

特に市外に向けた情報発信やPRには力を入れており、東京都内でも独自に展示会を開催しているほか、台湾での国際見本市やジェトロ主催の商談会に参加するなど、国内外での販路開拓を支援してきました。

繊維産業については、事業所数の減少や技術者の高齢化など、厳しい状況にあります。高

い技術を持つ市内企業の発展を図るため、さまざまな施策を展開しながら、「元気で活力あるまちづくり」を推進しているところです。

片岡 日本古来の陶器窯のうち、中世以来の歴史を誇り、現在まで生産が続いている6つの産地を「日本六古窯」と呼んでいます。日本六古窯のうち、最も歴史が古く、大きい産地だったのが常滑です。

平安末期から約1000年の歴史を有する常滑焼の最大の特徴は、それぞれの時代のニーズに合った製品を作り上げてきたところにあります。近代以降は、朱泥の急須、土管、焼酎瓶、建築陶器など、生活に身近な日常雑器を中心に生産してきました。

しかし、現在は出荷額が平成3年に比べておよそ半分に、事業所の数も3分の1強に減少するなど、急激に規模が縮小しています。その中で、近年はタイルや衛生陶器など、大規模工場



市内に残るノコギリ屋根工場。写真は国登録文化財の旧曾我織物工場(桐生市)

現存するレンガ造りの煙突や
窯、黑板塀の工場、陶器の
廃材を利用した坂道などの
あるエリアを「やきもの散歩道」
としてPRしています。



片岡 憲彦
常滑市長(愛知県)

による工業製品が出荷額の多くを占めるようになっていきます。

こうした中で、常滑市では、「常滑焼海外戦略事業補助金」の制度を設け、海外での販路拡大に向けた出展事業などを支援してきたほか、常滑焼を資源として生かした観光振興にも力を入れてきました。特に最近、中部国際空港の立地都市としての地の利を生かして、共通の食

文化を有する半田市、碧南市、西尾市と連携しながら、新たな観光資源を創り出す「竜の子街道プロジェクト」を展開しています。

また、常滑市では、平成25年に、「常滑焼の器に注いだ地酒による乾杯を推進する条例」を制定しました。乾杯条例はさまざまな地域で制定されていますが、地酒と伝統工芸の一体的な普及、振興を図った条例は全国でも初めてのものです。同時に、地元の若者に常滑焼の次代を担ってもらおうと、人材育成に向けた取り組みも進めています。

平木 橋本市の代表的な伝統工芸といえばパイル織物です。パイル織物は霊峰高野山への参詣口の一つとして発展した高野口地区で伝統的に織られてきた織物で、新幹線の座席シートや国会議事堂の椅子、さらには有名なデザイナーズブランドの布地などに使われてきました。世界的にも高度な技術として知られていますが、「最終製品」ではなく、素材生地での出荷がほとんどのため、なかなか産地の名前が伝わらないことに加えて、海外からの輸入製品の流入により、価格競争に巻き込まれる状況が続いてきました。そこで、私が市長に就任以降、「はしもとブランド推進室」を設置し、パイル織物のブランド化の推進、独自商品の開発に力を入れてきました。

大量生産、大量消費の時代が終わりを告げる中、いかに小ロットの製品を生産し、効果的に販売する仕組みをつくることができるか、企画販売を担う東京の会社とコラボしながら、試験的に事業を進めています。さらに、今後は高度な技術を生かして、新たに産業資材へも用途を広げていきたいと考えています。



道路沿いのコンクリート壁にさまざまな猫のオブジェが飾られる「とこなめ招き猫通り」(常滑市)

橋本市を代表するもう一つの伝統工芸が、伝統的工芸品に指定されている「紀州へら竿」です。130もの工程を1人の竿師が担い、完成までに半年から1年もの歳月を費やす工芸品で、以前は一本100万円の値段がつくほど高価なものでしたが、近年はカーボン素材の釣竿の登場で、需要が小さくなっています。そこで、市独自の補助金制度を設け、海外への販路開拓など、各種支援策を講じています。

城間 那覇市をはじめ、沖縄県は全国的に見ても、数多くの工芸品を有する、「工芸の宝島」とも称される土地柄です。琉球王国の保護の下、14世紀以来中国をはじめとする東アジアなどの海外や日本とのダイナミックな交流・交易を通して、19世紀中ごろに磨き上げられ、完成した多種多様な工芸品が多くあります。実際、沖縄県の伝統的工芸品は全国で4番目の15品目にも及ぶほか、那覇市においても「壺屋焼」「琉球漆



ラフォーレ原宿を会場に行われる「高野口パイルファブリック展」(橋本市)

器「琉球びんがた」「首里織」の4つが伝統的工芸品に指定されています。

那覇市ではこうした工芸品に触れるための文化施設として、「那覇市歴史博物館」「那覇市立壺屋焼物博物館」「那覇市伝統工芸館」を設置し、作品の展示やPRを行ってきました。同時に、平成24年から那覇市伝統工芸館への誘客を促し、市民や観光客に伝統工芸のPR活動を行うことを目的とした「那覇市伝統工芸ブランド確立事業」も進めています。

ほかにも、那覇市では「琉球泡盛」「かりゆしウェア」など、地場産業の振興にも努めています。600年前から続く「琉球泡盛」は近年、県外、海外でも認知度が上がっており、琉球料理とともに世界遺産登録を目指す動きも出ています。

また、「かりゆしウェア」は沖縄県内の行政機関、多くの企業において、「夏の正装」として定着しており、平成12年の九州・沖縄サミット、

平成17年のクールビズの開始などに伴い、全国的にも広く普及してきました。平成12年のサミット時には約11万枚だった製造枚数は、平成25年時にはおよそ4倍の約43万枚にまで増加しています。

ブランド力の向上に向けて

細野 伝統工芸・地場産業が発展するためには、ブランド力や認知度を高めることも必要である

「はしもとブランド推進室」を設置し、パイル織物のブランド化の推進、独自商品の開発に力を入れています。

平木 哲朗
橋本市市長(和歌山県)

と思います。この点についてはどのような取り組みを進めていますか。

亀山 先ほど「西の西陣、東の桐生」と言いましたが、西陣織は圧倒的なブランド力がある一方で、桐生織の知名度は高くありません。橋本市のパイル織物と同様、完成品として世に出ることが少ないという事情も背景にあるでしょう。そこで、桐生市では平成28年から、中小企業地域資源活用促進法に基づき、「桐生の織維関連製品」をふるさと名物として応援するとともに、販路開拓を支援するなど、桐生市の織維製品の競争力向上に努めています。

平木 橋本市では、毎年東京のラフォーレ原宿を会場に「高野口パイルファブリック展」を開催しています。近年は素材を提供するだけでなく、オリジナル商品の展示も積極的に行うようになりました。また、桐生市の桐生織と同様に、パイル織物をふるさと名物として宣言し応援しています。

片岡 常滑市でも、東京ドームを会場に行われる国内最大級の器の祭典「テーブルウェア・フェスティバル」をはじめ、さまざまな展示会に参加しているほか、常滑市出身の有名シェフに、常滑焼の器を使っていたくなど、さまざまな形で常滑焼を発信しています。幸いなことに、今中国では常滑焼の急須の需要が大きく、売れ行きも好調です。中国の急須は注ぎ口と取っ手が一直線になっていますが、常滑焼の急須は直角となっている点が、斬新なデザインと受け止められているようです。

城間 今後は、これまでの工芸品としての歴史や伝統を「守る」だけでなく、新しい感覚も取り入れて、新規開発につなげるなど、「攻める」姿



多数の工芸品を展示するとともに、製作体験なども行える「那覇市伝統工芸館」(那覇市)

勢も重要だと思っています。その観点から、那覇市では毎年開催する「那覇の物産展」において、優れた新商品に市長賞を授与することで、新規商品開発の促進、消費者への本市製造品の周知を図っています。

観光資源としての活用に活路

細野 近年では伝統工芸や観光資源としても注目されるようになりました。各都市ではどのように伝統工芸を観光に生かされていますか。

片岡 常滑市では、現存するレンガ造りの煙突や窯、黒板塀の工場、陶器の廃材を利用した坂道などのあるエリアを「やきもの散歩道」としてPRするなど、やきもの文化を観光資源として積極的に活用しています。さらに、常滑市は、「招き猫のふるさと」としても売り出しています。名鉄「常滑駅」から東の陶磁器会館に向かう道路沿いのコンクリート壁に39体の「御利益陶製招

工芸品としての歴史や
伝統を「守る」だけでなく、
新しい感覚も取り入れて
開発につなげるなど、
「攻める」姿勢も重要です。



城間 幹子
那覇市長(沖縄県)

き猫」を、その上方に幅6.3m、高さ3.8mの「巨大招き猫『とこにゃん』」を設置しており、すっかり、まちのランドマークとして観光客や市民に親しまれていますよ。

城間 那覇市でも、国際通りと壺屋やちむん通りの入口の2カ所に、「うふシーサー」と呼ばれる高さ3mを超える巨大なシーサーを設置しています。壺屋焼の陶工の方々から5カ月もの歳月を掛けて完成させたもので、ともに市の中心市街地のシンボルとなっています。

亀山 桐生市内に残るノコギリ屋根工場群は全国屈指の約200棟以上に上ります。さらに日本遺産「かかあ天下―ぐんまの絹物語―」に指定された群馬県内の12の構成資産のうち、6つが桐生市に存在します。加えて、平成24年には、織物業で栄えた桐生の歴史を今に伝える桐生新町地区が国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されました。

これらの豊富な資源を生かし、観光コースも整備しながら、織物工場の見学、製作体験なども含めた産業観光の振興に取り組んでいきたいと考えています。

平木 橋本市では、これまで市の観光振興をテーマに、民間の方々の参画の下で協議会を立ち上げ、議論を交わしてきました。その結果、今年の秋から民間を中心としたDMOを立ち上げ、まちを挙げて、観光振興に努めることになりました。今後は、市内のバイル織物の制作現場などを中心に、観光客を誘導することで、多くの人に市の伝統工芸に触れていただきたいと考えています。

細野 工芸品のブランド化や観光振興を具体的に進めるとなると、地元の方々の理解や協力も不可欠になるでしょう。この点は、どのように考えていらっしゃいますか。

片岡 最近では、ペットボトルのお茶を飲むのが一般的でしょう。実は、急須の生産地である常滑でさえ、急須で淹れたお茶を飲む家庭は少なくなっているという調査結果があります。そこで、とこなめ焼協同組合では、急須を使ったお茶の淹れ方講座「お茶ナビの会」を小学校で行っています。いかに、急須で淹れたお茶はおいしいか、まずは市民の皆さんに知っていただきたい

いですね。

平木 橋本市でも同じ悩みを抱えています。パイル織物の良さを地元の人ほどご存じないのです。そこで、これまで出生届を提出されたご家庭へのプレゼントとしてお渡ししていた絵本に代えて、パイル織物のおくるみを贈ることにしました。

亀山 生活様式の変化によって和装離れが進んでいることへの対策として、桐生市では「きものファッションショー」「きものワインパーティー」などのイベントを開催しています。必ずしも市民向けのイベントではありませんが、関連団体と連携しながら和装の需要喚起に取り組んでいるところです。

城間 沖縄県では県内、市内で製造・加工された地場産品を優先的に使用してもらおうとともに、愛用していただくためのPRとして、毎年7月に「県産品奨励月間」を展開しています。こうした取り組みも地場産業の振興には効果的だと思います。

後継者育成に向けて

細野 それぞれの伝統工芸・地場産業が今後も



細野 助博
中央大学総合政策学部教授

持続的に発展していくためには、後継者の育成も課題でしょう。それぞれの市では、どのような支援策を講じていらっしゃいますか。

亀山 繊維産業の次代を担う人材育成として「桐生繊維大学」を開校しています。繊維業界の動向、素材や染色に関する知識、先進分野の状況、マーケティングなど、幅広い知識を習得できる体制を整えています。

片岡 常滑市には資料館、陶芸研究所、研修工房の3つの施設を併設した「とこなめ陶の森」があります。伊奈製陶株式会社(現LIXIL)の創業者、故伊奈長三郎氏が寄附された同社株式の資金で開設された施設です。2年の研修期間には、伝統・現代作家を講師に迎え、それぞれの個性を生かす授業カリキュラムが設定されています。

平木 従来、紀州へら竿の竿師は、親方が弟子をとり、技術指導から生活の面倒までを見る「師弟制度」で育成されてきましたが、平成18年から紀州製竿組合では「^{たくみ}匠工房」を開設し、複数の竿師が2年間で基本的な技術を教えるようになりました。とはいえ、なかなかこれだけでは生活を立てるのは難しいようで、アルバイトをしながら制作を続ける修了生もいます。

城間 那覇市でも人材育成が喫緊の課題です。で、国・県と連携して継続して支援を行っておりますが、育成された方の受け皿が少ないという現状があります。いかに伝統工芸を生業として成り立たせていくかについても考えていく必要があると思います。

細野 本日は、長期にわたって築き上げられた本物の技術、こだわりの製品をいかに発展させ、次代に伝承させていくかという点につ

て、幅広くご議論いただきました。

皆さんのお話を聞きまして、伝統工芸・地場産業を振興するためには、一つの業界だけで取り組むのではなく、観光業界など、関係業界・団体を広く巻き込むことが大切だということがよく分かりました。

今後ともさまざまな関係者の力を結集し、伝統工芸・地場産業の振興・発展に努め、併せて地域全体の活性化につなげていただければ願っています。本日はどうもありがとうございました。

(平成29年4月12日、全国都市会館にて開催)

本コーナーは隔月掲載となります。次回は7月号に掲載予定です。

